

平成20年度の企画

平成20年度は、3回の企画展を開催しました。

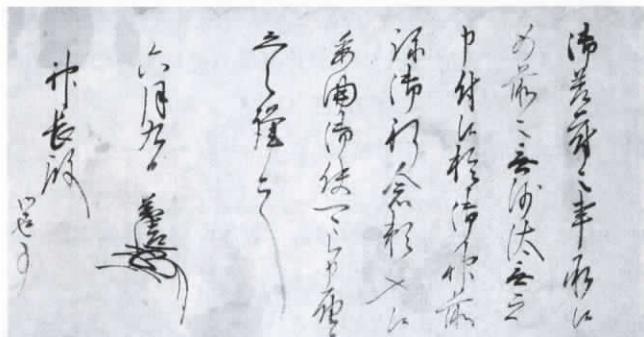
1回目は、「信濃の武将たち」と題して、平成20年4月12日（土）から5月25日（日）まで開催しました。信濃守護を勤めていた小笠原氏に関する記録や、諏訪氏、坂城の村上氏、長野の井上氏、上伊那の松嶋氏、上田の真田氏、千曲の屋代氏から、神長官守矢氏に送られた古文書を展示しました。祭礼に関連して、諏訪に信濃の国中の情報が集まり、また、各地の武将たちと連絡をとりあっていたことがわかります。

2回目は「幕末の諏訪」を、8月9日（土）から9月23日（火）まで開催しました。元治元年（1864）の水戸天狗党と諏訪高島藩・松本藩が合戦したときの諏訪上社の対応や、慶応4年（1868）に偽勅使と後年言われる高松実村隊が諏訪を通過した時の上社の対応など、神長官守矢氏の日記を中心として展示しました。

3回目は、「丑年の古文書」を、平成21年1月1日（木）から18日（日）まで開催しました。応永4年（1397）11

月24日に発生した、最古の御神渡りの記録や、戦国・江戸時代の記録や手紙など、丑年に作られた古文書を展示しました。

1年を通じて、様々な角度から、守矢文書の展示を行いました。守矢文書は、鎌倉時代から大正時代にいたるまでの古文書や古記録を収蔵しており、多くの情報を現代に伝えています。



村上義清書状

■文化財係

上原城下町遺跡の発掘調査

平成20年5月から8月にかけて、上原公民館の新築工事に伴い発掘調査が行われました。発掘調査により、古墳時代と中世の集落の跡が発見されました。

弥生時代の住居址1軒、古墳時代の住居址18軒・土坑数基、中世の掘立柱建物址の柱穴が多数・地下式坑1基・井戸址2基・溝址3条が検出されました。

これまで、茅野市では古墳はありますが、集落はほとんど発見されていませんでした。しかし、近年の調査により、ちの区の構井遺跡・家下遺跡に古墳時代の集落が存在していることが確認され、今回の調査により、上原にも集落があることが確認されました。

現在上原地区で発見されている古墳は、永明寺山の山腹にあり、これらの古墳が見下ろす位置に、集落があったことがわかります。

中世の遺構では、多くの掘立柱建物址の柱穴が発見され、多くの建物が建ち並んでいたことがわかりました。また、井戸が2基発見され、この地に住んでいた人々の共同井戸であったことが考えられます。溝の一つは、幅4m・深さ

2mの巨大なものであり、集落が巨大な溝によって区画されていたことがわかりました。

この遺跡は、上原城の麓にある遺跡で、出土遺物から室町時代（1300～1400年代）と戦国時代（1500年代）の集落であることがわかっています。この時代は、諏訪の領主であった諏訪氏と武田氏が治めていた時代で、その居館は上原にありました。今回、出土した建物群は、領主居館の周辺に発展した「町」の跡であると考えられます。



上原城下町遺跡と上原城

茅野市の博物館・文化財だより ハケ岳通信 No.27 発行年月日 平成21年3月31日

編集・発行 茅野市尖石縄文考古館 ☎391-0213	茅野市豊平4734-132	TEL (0266) 76-2270
茅野市ハケ岳総合博物館 ☎391-0213	茅野市豊平6983番地	TEL (0266) 73-0300
茅野市美術館 ☎391-0005	茅野市仲町1-22	TEL (0266) 82-8222
茅野市神長官守矢史料館 ☎391-0013	茅野市宮川1389番地の1	TEL (0266) 73-7567

県天然記念物ミヤマシロチョウの保護活動

日本には約250種、このうち諫訪地方には約130種のチョウが生息しています。このように、多くのチョウが生息しているのは、3,000m級の山々が連なる八ヶ岳に象徴される変化に富んだ生息環境があるからです。

しかし、近年、八ヶ岳では高山蝶のミヤマシロチョウが絶滅の危機に瀕しています。減少の原因は、各種開発や森林放置による植生遷移などによるものと考えられます。

一刻も早く保全の手を差し伸べることが必要であるとの共通認識の下で、茅野市でも有志が集まり、2008年3月2日に当館を事務局として「茅野ミヤマシロチョウの会」が発足しました。多くの方の賛同を頂き、2009年3月1日現在で、会員数は約70名となっております。



撮影：三浦 克己

ミヤマシロチョウは、明治34年に、奥蓼科の明治温泉で、千野光茂により発見され、八ヶ岳で唯一、新種登録されたチョウです。環境省レッドデータブック絶滅危惧II類、長野県の天然記念物、特別指定希少野生動植物に指定されており、分布は長野県とその周辺の標高1400-2000mの亜高山帯に限られています。幼虫は巣をつくり集団生活し、天敵を避けて夕方から夜間に活動し、3歳で越冬します。5歳幼虫で蛹になり、7月に成虫となって飛翔します。幼虫の食樹は、ヒロハヘビノボラズやメギ、成虫の吸蜜植物は、アザミ、クガイソウなど多様です。

茅野ミヤマシロチョウの会の活動は、現在、阿弥陀岳南陵の生息地を対象として進められています。主として、生息地の保全と整備、違法採取者に対するパトロールなどの保護活動、チョウおよび生息環境の調査、生態系やその保全活動に関する学習会、子供や一般市民を対象とした観察会なども開催しています。

生息地の保全活動として、ヒロハヘビノボラズの更新をめざした剪定作業や、成虫の飛翔空間を広げ、吸蜜植物の

生育を促すために林床に光を取り込むことを目的とした森林の整備（樹木の除伐、枝払い、下草刈り）などの作業にも汗を流しました。



成虫発生時期の7月中旬から8月初旬にかけては、会員数名が交替でパトロールと生態調査を行いました。会員は優雅にV字飛行を繰り広げるミヤマシロチョウの姿や様々な花での吸蜜、河原での吸水、交尾、産卵という一連の生態に感動し、写真撮影にも夢中になっていました。同時に、連日の暑さに加え多数のアブとの闘いもありましたが・・。

このような地道な活動が、やがて、このチョウの個体数の増加をもたらし、市民だけでなく、八ヶ岳を訪れる多くの方にこの優雅なチョウの乱舞を楽しんでいただくことを期待しています。また、このような取り組みが、ミヤマシロチョウだけに限らず、八ヶ岳山麓の生態系や生物多様性の保護にも貢献し、豊かな自然を後世に伝えていくにつながると考えています。



撮影：永田 博

「茅野市美術館 地域をみつめるプロジェクト」

茅野市美術館では、平成20年度より「茅野市美術館 地域をみつめるプロジェクト」をスタートしました。日本全国の失われゆく茅葺屋根の民家や風景を描き続けた向井潤吉。そして里山、棚田、茅葺屋根等の地域の風景を描き続けている茅野市出身の篠原昭登。2つの展覧会に加え、多くのゲストを迎ながら、自然、言葉、素材、歴史、音など様々な角度から地域をみつめました。

平成20年度 常設展 第1期収蔵作品展「地域をみつめる」

4月11日（金）～6月22日（日）

第1期収蔵作品展 学芸員によるギャラリートーク

5月11日（日）

地域を歩くワークショップ 講師：篠原昭登（洋画家）

5月6日（火・休） 場所：宝勝寺

篠原昭登展 八ヶ岳山麓に魅せられて

5月28日（水）～6月9日（月）

篠原昭登 作品解説会「八ヶ岳山麓に魅せられて」

6月1日（日）

財団法人地域創造 平成20年度市町村立美術館活性化事業
世田谷美術館所蔵作品による 向井潤吉展 風土をみつめる旅

7月12日（土）～8月24日（日）

記念講演会「向井潤吉の画業にふれて」 講師：橋本善八（世田谷美術館 美術担当課長）

7月13日（日）

土壁ワークショップ 講師：藤森照信（建築史家）

7月20日（日）、21日（月・祝）

朗読会「向井潤吉・旅の記憶、旅の言葉」

8月8日（金） 朗読：久保恒雄（俳優・黒テント）

向井潤吉展 学芸員によるギャラリートーク

8月9日（土）、23日（土）

音風景ワークショップ～地域の音を録音して、みんなで聞こう～ 講師：庄野泰子（音環境デザイナー）、久保げしょ（茅野市民館音響担当）

8月10日（日）、17日（日）、11月24日（月・祝）

1月18日（日）、3月20日（金・祝）

夜楽塾「地域をみつめる－過去・現在・未来－」 講師：篠原昭登（洋画家）、木之下晃（音楽写真家）、藤森照信（建築史家） 司会：倉田直道（都市計画家）

8月28日（木）

収蔵作品展「地域をみつめる」では田村一男、小堀四郎、矢崎牧廣、中尾彰、篠原昭登という5人の地域ゆかりの作家の作品を展示しました。

篠原昭登展では八ヶ岳山麓を取材した作品と作品制作の

ために描かれたスケッチを展示しました。また地域の中の美を発見することをテーマに市内の宝勝寺周辺を作家と参加者が一緒に地域を歩き、スケッチを行うワークショップを行いました。

向井潤吉展では向井氏によって日本各地で取材された作品を展示しました。長野県を取材した作品も多く、特集展示を行いました。また茅野市出身の建築史家・藤森照信氏を招き、竹とよしずによる骨組に赤土をこねて塗り、土壁の家「C庵」を作りました。8月末まで中庭で展示をしました。その他、関連イベントとして、講演会、朗読会、ギャラリートークを行いました。

音風景ワークショッ

ップでは音環境デザイナー・庄野泰子氏の講義の後に、録音機を使い、身の回りの音を再発見しました。そしてワークショップの参加者が録音した地域の音を集め、音風景のコンサートを開催しました。収集した音をライブラリー化しCDにまとめ茅野市民館図書室に設置、また茅野市民館／茅野市美術館ホームページでも公開しました。来年度もワークショップを継続し、地域の音のライブラリー化を行っていきます。

夜楽塾「地域をみつめる－過去・現在・未来－」では、地元出身の絵画、写真、建築史、都市計画を専門とし、本年度の美術館事業に関わりの深い各氏を迎、地域を振り返り、地域の現在、そして未来を考えました。

来年度以降も、様々な角度から地域の素晴らしさをみつめていきたいと思います。



地域を歩くワークショップ



土壁ワークショップ



朗読会「向井潤吉・旅の記憶、旅の言葉」



音風景ワークショップ

茅野市八ヶ岳通信

■尖石縄文考古館

「尖石縄文考古館」と“市民”の活動

「尖石」を舞台とする考古学研究の始まりは、尖石遺跡の発見と考古学界への報告から宮坂英式先生による日本最初の縄文時代集落跡の発掘にあります。

当時宮坂英式先生は、小学校で教鞭をとるかたわら、尖石遺跡を始めとする茅野市内の遺跡を発掘・研究していました。宮坂先生の活動に対しては、地元市民や考古学・歴史学に興味をもつ多くの方々の協力があったことは、これまで考古館の特別展などで紹介してきました。

尖石遺跡に隣接する与助尾根遺跡においては、南信日々新聞社主催で「尖石を守る会」が結成された昭和24年に、現在の史跡公園の原型となる復元家屋の建設が行われました。現在考古館には、尖石・与助尾根遺跡に関する記録や写真が保管されていますが、この中に復元家屋の屋根の葺き替えの様子が収められたものがあります。この写真には作業に加わった多くの地元市民の方々の姿が映っています。

尖石遺跡をめぐる活動を振り返ると、史跡公園も考古館も、考古学を一市民として勉強した宮坂英式先生をはじめとする多くの市民の手でつくりあげたものであるということがわかります。

尖石縄文考古館では、3月末まで、「史跡公園・竜神池周辺の野鳥たち」と題する写真展に加え、尖石ボランティア・サークル活動と北山小学校でのクラブ活動を紹介した「市民活動展」を開催してきました。“野鳥展”は、史跡公園を訪れる市民の方々が撮影した写真で飾られました。2月から開催してきた「市民活動展」では現在尖石縄文考古館で活動しているボランティア、考古館を活動場所としている



る尖石サークルの活動をご紹介してきました。史跡公園の維持については、尖石ボランティア「みずならの会」の方々のご協力を得ています。考古館の展示解説は「語り部の会」の方々が自主學習をもとに解説していただき来館者からお礼の手紙なども寄せられています。

サークル活動にはいくつものグループがありますが、その一つに「土器サークル」があります。考古館に収蔵されている土器をモデルに土器作りをしている方々です。活動場所は展示スペースから続く体験学習コーナーですが、考古館への来館者が土器作りをしているサークル会員の方々に土器作りについて質問している様子を見かけることがあります。土器サークルの活動は自主的な市民活動ですが、この活動が「動く展示」の効果を果たしています。

「市民活動展」では、尖石縄文考古館文化財係の学芸員が講師を勤めた茅野市北山小学校「縄文クラブ」の国史跡上ノ段遺跡での調査も紹介しました。「縄文クラブ」の活動は上ノ段遺跡での表面採集調査を行い、採集した土器の文様を勉強し、上ノ段遺跡が営まれた年代を調査したものです。現在史跡公園となっている与助尾根遺跡は、宮坂英式先生と高校生の手で調査されたことが思い起こされます。

「尖石縄文考古館の活動」は、施設としての活動だけでなく、考古館で活動されている市民の方々の活動を含めその総体が「尖石縄文考古館」であると考えています。

今後、博物館学習会員の募集と、同時に尖石ボランティア・サークル会員の募集も行います。興味のある方はぜひ尖石縄文考古館にお問い合わせください。